

平成30年度 シンポジウム 開催報告

「四国八十八箇所霊場と遍路道」世界遺産登録推進シンポジウム

- 日時 平成31年1月27日(日) 13:30~16:00
- 場所 ザ・クラウンパレス新阪急高知(高知市本町4-2-50)
- 内容 ■基調報告
- 「世界遺産に求められることと期待できること」
下田 一太 氏(文化庁文化資源活用課文化遺産国際協力室文化財調査官)
- 「四国遍路の世界遺産登録に向けた取組と課題」
北山 健一郎
(「四国八十八箇所霊場と遍路道」世界遺産登録推進協議会事務局・香川県文化芸術局文化振興課)
- 基調講演
- 「人はなぜ四国を巡るのか〜四国遍路の求心力〜」
胡 光 氏(愛媛大学法文学部附属四国遍路・世界の巡礼研究センター 副センター長)
- パネルディスカッション
- 「四国遍路の世界遺産登録に向けて」
コーディネーター 大石雅章 氏(鳴門教育大学 副学長)
- パネリスト 下田一太 氏(文化庁文化資源活用課文化遺産国際協力室文化財調査官)
胡 光 氏(愛媛大学法文学部四国遍路・世界の巡礼研究センター副センター長)
長崎勝教 氏(第三十八番金剛福寺住職 四国八十八箇所霊場会土佐部会長)
- 組織 主催 「四国八十八箇所霊場と遍路道」世界遺産登録推進協議会
協力 四国遍路日本遺産協議会
後援 徳島県、徳島県教育委員会、高知県、高知県教育委員会、愛媛県、
愛媛県教育委員会、香川県、香川県教育委員会

■ 概要



「四国八十八箇所霊場と遍路道」世界遺産登録推進協議会は、平成31年1月27日(日)、高知県高知市のザ・クラウンパレス新阪急高知において、「四国八十八箇所霊場と遍路道」の世界遺産登録に向けた世界遺産登録推進シンポジウムを開催し、当日は約100人が参加した。四国遍路の研究者や世界遺

産の専門家、札所寺院の住職等を招き、四国遍路の歴史や特徴を紹介しながら、「顕著な普遍的価値の証明」の検討にあたっての課題の確認のほか、世界的にも注目が高まっている地域社会との連携等について活発な意見交換が行われた。四国遍路の世界遺産への登録に向け、改めて理解を深める機会となった。

■ 関係者挨拶



「四国八十八箇所霊場と遍路道」
世界遺産登録推進協議会会長
千葉昭(四国経済連合会会長)

冒頭で、本協議会の千葉昭会長は、「近年、特に外国人の姿が多く見られるようになっており、四国の遍路文化には宗教や国籍に関係なく、広く世界の人々に受け入れられる普遍的な価値があると実感している」と述べ、協議会として、世界遺産登録の前段階である国内暫定リスト入りを早期に実現し、取組みを加速させたいと抱負を語るとともに、本シンポジウムが世界遺産登録に向けた大きな一歩となることを祈念すると挨拶した。



「四国八十八箇所霊場と遍路道」世
界遺産登録推進協議会副会長
尾崎正直(高知県知事)

続く開催地挨拶では、高知県の尾崎正直知事が、「世界遺産登録を目指して取り組んでいく過程の一つ一つが意義深いものであり、四国の教育や文化、国際観光に資することは間違いないと思っている」と語り、「この取組みを着実に進め、悲願の世界遺産登録を皆様とともに勝ち取っていきたい」として、参加者に理解と協力を呼びかけた。

■ 基調報告

「世界遺産に求められることと期待できること」



文化庁文化資源活用課
文化財調査官 下田一太氏

文化庁の下田一太調査官から、世界遺産までの道のりと近年の動向、世界遺産に期待できること等について報告いただいた。

世界遺産の近年の動向として、登録数が増え、審査や保護に係る負担が増したことから審査件数を制限する流れにあるとし、見ただけで分かるものから、説明を聞いて初めて価値が証明される資産に対象が広がっていると紹介。登録に向けては、評価基準を満たした価値、真実性・完全性、確実な保護と管理の措置からなる「顕著な普遍的価値」を証明する必要があると、四国遍路についても、本質的な資産の価値や、四国遍路が完全であるとは何なのかを突き詰めて考え、他の道の資産

の論理を検証するような作業も必要と助言した。

また、世界遺産が多様化し、生活の場が対象となってきたことから、近年ではコミュニティの参画が不可欠という認識が高まっており、「資産保全が地域の人々の利益として還元される仕組みを模索していくことも非常に重要な観点と思う」と語った。

最後に、世界遺産に期待できることとして、「登録に向けた過程で、新しい調査や知見のほか、研究者や住民、行政等による議論と合意が生まれ、四国4県が方向性を検討し、ビジョンを共有する機会となる。海外からの視点にさらされることで初めて気づく地域の重要性もあるので、自分たちの文化を理解するためにも世界遺産は有効なツールとなるはず」と語り、世界遺産登録に向けたプロセスのメリットを前面に出し、生かしていくためにどのような仕掛けが必要かについても議論してほしいと提言いただいた。

■ 基調講演

「人はなぜ四国を巡るのか ～四国遍路の求心力～」

愛媛大学 四国遍路・世界の巡礼研究センターの胡光副センター長から、四国遍路の歴史と魅力について講演いただいた。

1200年以上前に空海が山林で修行を行ったように、四国の辺地で僧が修行をしていたのが四国遍路の原型と考えられる。その後、江戸時代以降に修行の旅から現在の巡礼の旅へと変わるきっかけを作ったのが真念で、『四国邊路道指南』というガイドブックを作成し、自ら巡礼して遍路道へ道標を建てていったが、「このような道標が遍路道にはたくさんあり、庶民が、庶民のために作っていたのが四国遍路の大きな特徴の一つ」と語った。札所では、本堂とともに必ず大師堂を参るのも特徴で、多様な信仰が大師信仰によって結ばれているという。また、納札や落書の調査研究により、地元や対岸から来る遍路者が多いことがわかってきており、遍路日記では四国に入ると接待の記録が現れることから、江戸時代の人もお接待を四国の特徴と思って書き留めていると語り、「必ず接待を受け、接待側も名乗るという相互の関係が見える」と紹介した。

四国遍路は「巡礼の形態が最も発展し、庶民化した我が国の典型的な巡礼」であり、巡礼の中で唯一<遍路>と呼ばれる。それを支えているのが、お接待と呼ばれる四国の文化であるという。最後に、近年増加傾向の外国からのお遍路さんが札所だけでなく道を重視していることに触れ、「道と遍路を支える地域力が四国の重要な文化であり、失われた日本の文化でもあると思うが、このことが四国遍路を世界遺産へと導く<顕著な普遍的価値>を考える鍵になるのではないか」と語り、講演をまとめた。



愛媛大学法文学部 四国遍路・世界の巡礼研究センター副センター長 胡光氏

■ パネルディスカッション

「四国遍路の世界遺産登録に向けて」



左から、コーディネーターの大石雅章氏、パネリストの下田一太氏、胡光氏、長崎勝教氏

最初に、高知県内にある第三十八番札所金剛福寺の長崎勝教住職が、昭和 20 年代頃から行われていた戦争体験者の追善供養が四国遍路を育て、それが各地に広がり、霊場会も発展してきたと語り、戦争体験者が今の四国巡礼の基盤を作ったという見解を紹介。今後も四国八十八ヶ所を守っていくためには、

「世界遺産への登録、インバウンド需要の取り込みといった新しい大きな流れを作っていかななくてはならない」と語った。

続いて、文化庁の下田一太調査官は、四国遍路の庶民信仰、回遊型巡礼、お接待文化といった価値を世界遺産の評価基準に適合させていく必要があり、アトリビュート（属性）の設定なども工夫しながら国内外の資産との比較研究が求められると述べ、「1200年以上にわたる時代のどこに価値をおくのか、焦点を明確にしていく作業が重要」と説いた。また、お接待など無形的要素がある四国遍路の場合、無形的な要素を評価する世界遺産の基準vi（顕著な普遍的価値をもつ生きた伝統・信仰等と直接または実質的関連のあるもの）をどう整理するのが重要なチャレンジになると強調した。

愛媛大学の胡光教授は、四国遍路について、1200年前の修行の世界、巡礼となる江戸時代以降という2段階の成立があるとし、そのうち「庶民が八十八ヶ所を巡り、現代につながる巡礼としての形を整えていく江戸時代以降にスポットをあてて考えていくことが重要」と語った。また、今後の取組みについて、「お接待を目に見える形で整理していくために、丁石や道標、接待所といったものをもっと見つけて調べていく必要があるのではないか」と提言した。

最後に、コーディネーターを務めた鳴門教育大学の大石雅章副学長は、地域の住民の力なくして遍路道の維持はできないとして、「一番大事なのは、地域の住民が、四国遍路の文化に価値を見つけ、いかにして後世に伝え、世界に発信していくか、理解してもらいたいかという熱意」と語り、これからも地域との連携を考えながら、四国遍路の「顕著な普遍的価値」をさらに見出し、世界遺産登録につなげていけるよう検討していきたいと総括した。